
パットン

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パットン

【Nコード】
N2816G

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
朝鮮戦争。第二次世界大戦から無敵を謳われたT-34を前面に押し出して快進撃を続ける北朝鮮軍。対するアメリカ軍はかつての猛将の名を冠した新型戦車を送り込むが。朝鮮戦争のお話です。

第一章

パットン

この戦争がはじまるとはまずは誰も思っていなかった。
当事者の側の一方であるソ連の独裁者スターリンですら最初はそんなつもりは一切なかった。

ところがだった。その彼に熱心に説いたのが金聖柱であった。
俗に金日成と呼ばれているがこれは偽名であるというのが今ではかなり濃厚な説になっている。抗日パルチザンの英雄であり不屈の名将であったという触れ込みであった。

ところがだ。あまりにもおかしかったのだ。どうおかしいかというところとした証言が残っている。

「金日成はこれで何人目だ？」

日本軍のある人物の言葉だという。その金日成と戦ったとされている日本軍は既に二人の金日成を捕らえてテロリストとして処刑していた。なお当時韓半島を日本として統治していた日本側からすれば金日成はただのテロリストである。

まず何人も金日成と名乗る人物がいた。しかも彼はかなり古くからいた。ところがこの金日成はやけに若い。第二次世界大戦が終わり朝鮮半島にやって来たこの男を見て皆首を傾げたという。

「若くないか？」

「ああ。何で若いんだ？」

首を捻って言い合った。

「もっと歳がいつている筈なのに」
「妙だな」

しかも彼の弟がその金日成となっている彼を見て驚いた顔でこう言ったという。

「兄貴、何でそこにいるんだ？」

と。つまり彼は伝説の將軍金日成になりすましていたのである。

この金聖柱なる男が中華人民共和国の成立を受けて一気に活気付いた。またこの時アメリカが防共ラインを日本からフィリピンのラインまで引き下げたのも彼を刺激した。

「半島を己のものにできる」

この男は野心家であった。山師にはよくある話だが野心はかなり大きかった。この韓半島を己のものにしようと企てたのだ。

こうしてスターリンに熱心に説いたのだった。今なら朝鮮半島を赤化できると。スターリンも最初は乗り気でなかったがそれでも彼の言葉に頷くことにしたのだった。

「できるのだな」

「できます」

彼は断言した。

「そして半島は我等のものです」

「そこまで言うのならやってみるといい」

スターリンはとりあえず彼にゴーサインを出した。

「援助を約束しよう」

「有り難き御言葉。それでは」

もっともこの時スターリンはこの男がヘマをすればそれで切り捨てるつもりであった。金聖柱は元々はソ連軍にいたことが確認されている。そこで中尉として戦いスターリングラードの戦いにも参加しているという。白頭山で抗日パルチザンをしているという話もこれでその信憑性に疑問が生じる結果となっている。なお息子の金正日もこの山では産まれていない。ソ連で産まれていることははっきりと確認されている。

何はともあれこの男の言葉で朝鮮戦争がはじまった。まずはソ連の援助を受けた北朝鮮軍の快進撃により戦争ははじまったのだった。

「三日でか!？」

「はい、三日です」

日本に司令部が置かれていたGHQではこの言葉が出ていた。何と大韓民国の首都ソウルは開戦から僅か三日で陥落したのだ。

開戦が六月二十五日であり陥落が六月二十八日である。これには誰も驚いた。

「しかも撤退の際橋を爆破しまして」

「橋にいた多くの市民が巻き添えになったのだな」

「その通りです」

こんな逸話までついていた。

第二章

「李大統領はソウルを脱出しました」

「大統領は確かソウルを死守すると言っていなかったか？」

「状況が変わったとのことですよ」

「実に早い状況の変化であつた。」

「それで」

「全く。何をやっているんだ」

はつきり言えば何もしていなかった。だから僅か三日で陥落したのである。

「それで北朝鮮軍はどうしているか」

「さらに南下を続けるとのことですよ」

「やはりな」

その報告を聞いて誰もが当然のことだと思つた。そもそもその為に戦端を開いたことが明らかだからだ。情勢を鑑みてみればだ。

「そう来るか」

「はい。それで国連ですよ」

第二次世界大戦後できた国際連合のことである。

「軍を派遣するそうです」

「あのソ連が賛成するとは思えないがな」

ソ連が北朝鮮のバックにいるのは確実だった。何しろ彼等はそのソ連の兵器を使っているのだから。

「それはな」

「では。ソ連はどう出て来るでしょうか」

この疑問が話に出て来た。

「やはり反対でしょうか」

「今出席をボイコットしていたな」

丁度中華人民共和国の国連加盟問題でソ連は国連の場において欠席が続けていたのである。

「それではそのまま出席せずだ。話が進められるな」

「そのままですか」

「欠席だが反対はしていない」

そこであつた。

「なら。何の問題もない」

この言葉通りの結果になった。ソ連は出席せずに会議ではアメリカ軍を中心とした軍が派遣されることになった。しかしその頃にはもう韓国軍は何と半島の端にある釜山にまで追い詰められてしまつていた。

「何つ、もうか!？」

「そこまで追い詰められているのか」

これには誰もが呆れてしまった。

「何と情ない話だ」

「今ここで釜山に上陸しても反撃できるのか？」

誰もが韓国軍のあまりものふがいなさ絶句したがそれには理由があつた。

北朝鮮軍は強かつた。やはりソ連からの援助を受けているのが大きかつた。ソ連軍で実戦経験を積んだ者が多かつたのも大きかつたがやはりこれであつた。

特にその中でも。最もその存在を誇示していたのはあれであつた。

「韓国軍はあの戦車に手も足も出ないようです」

「T-34にか」

「はい、あれです」

ここでこの戦車の名前が出て来たのであつた。

「あの戦車の前に一敗地に塗れているとのことですよ」

「そうか、あれが出て来たのか」

誰もがT-34と聞いて顔を顰めさせたのであつた。

「あの戦車が」

「予想された展開では？」

「まあな」

このことは否定されなかった。

「ソ連といえはあれだしな」

「そうですね。カチューシャとあれです」

ここで言うカチューシャとはカチューシャロケットのことである。車両にロケットランチャーを積んでいてそれで一斉射撃を加えるのだ。その威力は想像を絶するものでありドイツ軍からはスターリンのパイプオルガンとも言われそのT-34と共に非常に恐れられていた。

「二つがソ連軍の象徴ですから」

「わかった。じゃあまずはだ」

「とりあえずはですね」

ここで話は少し変わった。

「マッカーサー元帥のお考えですが」

「ああ」

GHQの総司令官でありアメリカ陸軍元帥でもある。第一次世界大戦でも先の第二次世界大戦でも武功を挙げている。言うまでもなく今度の戦争でも総司令官になっている。

「このまま釜山には上陸しないとのことですよ」

「そうなのか」

「まずは仁川だそうです」

「あそこか？」

「はい、あそこですよ」

こう話される。その仁川とは韓国の首都ソウルのすぐ側にある。そこに上陸するというのだ。

「あそこから上陸して反撃に移るつもりだそうです」

「そうか。敵の横腹を突くか」

「どうやら」

「それはわかった」

まずは仁川上陸には頷くのだった。

「上陸場所はな。しかしだ」

「問題はそれで何を使うかですね」

「まずは空だな」

最初に話に出たのは空であった。

第三章

「そちらはこちらが圧倒している」

「はい」

「まずは空から集中的に叩く」

今も変わらないアメリカ軍の基本戦術である。第二次世界大戦でもこれにより無敵とまで言われたドイツ軍の戦車部隊を打ち破ってきている。

「ムスタングやコルセアでな」

「前と同じですね」

「ああ。前の戦争と同じだ」

第二次世界大戦のことである。

「その時と同じだ。まずはそれだな」

「ですね」

ムスタングとはF-51、コルセアとはF4Uのことである。この時やつとアメリカでも空軍ができた。またコルセアは海兵隊でもよく使われていて彼等が上陸の時に使うのだ。

「それで集中攻撃を浴びせるが」

「それとバズーカですね」

「ああ、バズーカは絶対だ」

「ですね」

アメリカ軍はこのバズーカでも相当な戦果を挙げている。後に大統領になるアイゼンハワーはこのバズーカをかなり重用したことも有名だ。

「それも持って行ってな」

「そして戦車ですが」

最後に話されるのはやはりこれであった。

「連中と同じ戦車ですが」

「まずはシャーマンとパーシングだな」

M - 4とM - 26のことだ。

「この二つはやっぱり必要だな」

「ドイツ軍の戦車に劣勢だったシャーマンでT - 34に勝てますかね」

「援護があればいけるだろ？」

「一対一だったら」

「正直難しいだろうな」

これは言うまでもなかった。ドイツ軍のパンテルやティーゲルといった恐ろしい戦車はソ連軍のT - 34に対抗して開発、建造されていた。それでも結局はT - 34に敗れた形となっている。なおこういったドイツ軍の戦車に対してアメリカ軍のそのシャーマンは一対一では絶望的なまでに劣勢であったのだ。

「それもかなりな」

「そうですね。やはり」

もうこれはすぐにわかることであつた。

「戦車戦だと」

「パーシングでも難しいかもな」

パーシングについても不安視されるのだった。

「正直なところな」

「そうですね。やはり相手が相手ですから」

「パットンか」

不意にこの名前が出て来た。

「あいつに賭けるしかないか」

「パットンですか」

「ああ、M - 46だ」

今度はこの戦車の名前が出て来た。

「あれにな」

「そうですね。新型ですし」

「性能はかなりのものなのだろう？」

「はい」

性能についてはとりあえずは太鼓判を押された。

「開発スタッフはそのT-34を超えているそうです」

「だったらまずは使ってみるか」

そのM-46という戦車について言われた。

「少なくとも。空もあるしバズーカもあるしな」

「そうですね。例えばそのパットンが駄目でも」

「名前の元のあいっつを思えば大丈夫だろうがな」

不意にそのパットンという何かの怪獣映画に出て来るような名前について言及された。

「あれだけ暴れ回ってくれたんだからな」

「私実はパットン將軍の下にいたことがあります」

こんなことを言う者も出て来た。

「いや、始終怒鳴って怒って罵倒して殴ってでして」

「本当にそうだったんだな」

「凄かったですよ」

そのパットン自身についての話にもなるのだった。

「何かってというと癪癢起こして。それでいて変に細かくて」

「いつもヘルメットもブーツもピカピカだったそうだな」

「はい、そうです」

実はそうなのだった。パットンという男は。

「自分をハンニバルの生まれ変わりだとか言ってそれで自信満々で」

「何か皆あいっつについては同じことを言うな」

「そんな人でした。けれど頼りにはなりませんでしたよ」

パットンのことを話すその彼の顔がにこやかなものになった。

「軍をグイグイと引つ張って勝たせてくれたんですから」

「じゃあ今度のパットンにもそれを期待するか」

「そうですね」

自然と人間のパットンと戦車のパットンが彼等の中で一つになっていた。

「この戦争にも勝たせてもらいましょう」

「絶対にな」

そんな話をしているうちにその仁川上陸となった。まずはこれは北朝鮮軍に対する奇襲になった。

「撃て！容赦はするな！」

「北朝鮮の奴等を逃がすな！」

英語、そしてトルコ語も混ざっていた。

「この上陸何としても成功させろ！」

「ア力を半島から追い出せ！」

そんな言葉が叫ばれながらアメリカ軍独特の大規模な空爆が行われ海兵隊が上陸する。まずはこの上陸は成功に終わった。

第四章

だが問題はこれからだった。北朝鮮軍はすぐに迎撃に出て来たのだ。その先頭にはやはりあのT-34が大挙して進撃して来ていた。

「来ましたね」

「ああ」

アメリカ軍の将兵達はその独特の丸みのあるシルエットを見て言い合った。

「あれをどうにかするかですけれど」

「空はどうなっているんだ？」

「一時間程かかるそうです」

こう返事が返って来た。

「一時間です」

「その一時間を持ちこたえられるかどうかだが」

指揮官の声が鋭いものになった。

「歩兵だけで行かせるのは無理だしな」

「例えバズーカがあってもですね」

「そういうことだ。やはり」

答えは一つしかなかった。

「戦車だ」

これであつた。これしかなかった。

「戦車を前に出す。いいな」

「パーキングですか？」

「それは二番手だ」

パーキングは二番手というのだった。

「当然シャーマンでもないぞ」

「シャーマンじゃ正面からあれと撃ち合ったら不利ですからね」

「ドイツ軍にあれだけやられたんだ」

第二次世界大戦の時を思い出しての言葉だった。シャーマンはド

イツ軍の戦車に対して劣勢だった。そのドイツ軍の戦車を苦しめた T-34 が相手ならばどういったことになるか。もう考えるまでもないことであった。

「だからだ。シャーマンは前面には出さない」

「それではやはり」

「そうだ、あいつだ」

あいつと呼ぶのだった。

「あいつを前に出せ。いいな」

「わかりました。それでは」

「あいつに賭けるしかない」

指揮官はこうも言った。目の前に砂塵と唸り声を共に出しつつやってくるその T-34 を見て。覚悟を決めたようにして言ったのだ。った。

「ここはな。あいつにな」

「では。今ここで」

そのパットンがやって来た。パーキングやシャーマンを圧倒するような威圧的な姿に見えるのはその名前のせいだろうか。だが名前通りの活躍をしてくれるかどうかはまだわからなかった。

「さて、と」

「今からこれがあの連中の相手をしますが」

またここで前方のその T-34 の軍団を見るのであった。

「どうですかね。一時間だけ持ち堪えてくれればいいんですが」

「だから言っただけ。賭ける」

またこう言う指揮官だった。

「ここはな。こいつにな」

「それじゃあ。行かせますね」

「ああ。若し足止めができればだ」

実はこの指揮官も足止めができればという程度しか期待してはいなかった。

「そこからパーキングにシャーマンを投入してバズーカも撃ち込ん

でな」

「それで倒すというわけですね」

「そのパターンだ」

アメリカ軍の基本戦術だった。総合的かつ圧倒的な火力で敵を粉砕する。この部隊には重砲はないがあればそれも使うのである。

「それでやる。いいな」

「わかりました。それじゃあ」

「進ませろ」

あらためてパットンを進ませるよう指示を出した。

「いいな」

「了解です」

こうしてパットンは先に進められた。そのままT - 34の軍団に向かう。パットンの軍団とT - 34の軍団がここでいよいよ砲火を交えることになった。

最初に火を噴いたのはT - 34だった。ドイツ軍を恐れさせたその八五ミリ砲が火を噴く。

それは一直線に向かいパットンを貫きそのまま炎上させる。筈だった。

だがその砲撃は見事に弾かれてしまった。パットンの装甲を貫くには至らなかったのだ。

「防ぎましたね」

「ああ」

指揮官達はパットンがT - 34の砲撃を退けたのを見てまずは安堵した。

「あの強烈な砲撃を」

「まずは防いだ」

「次はこちらの番ですが」

「九十ミリだ」

パットンに搭載されている砲のサイズである。

第五章

「その九十ミリならできるかもな」

「あのT-34を倒せるかも」

こうした期待すら胸に抱いてこれるようになってきていた。今のT-34の砲撃を退けたのが彼等をしてそう奮い立たせたのである。

「まさか」

「まだよくわからないが」

そう、まだこちらは攻撃すらしていなかった。

「できるかもな」

「ですね。ひよっとしたら」

こうは言っても彼等は明らかに期待していた。期待するようになっていた。パットンがT-34を倒すことを。そして今遂に。パットンの九十ミリ砲が火を噴いたのだった。

おそらく機器のせいだろう。その砲撃はT-34のものより正確であった。そしてその正確な砲撃がT-34を正面から撃ちその装甲を貫いたのであった。

「やった！」

「やりましたね！」

指揮官達はパットンの九十ミリ砲がT-34を貫いたのを見て声をあげた。

「T-34の装甲を貫いたぞ」

「しかも正面から」

その装甲を貫かれたT-34は動きを止めた。そうしてハッチの辺りから煙を噴き出し遂には。炎上してそこで果てたのであった。

見事な勝利であった。向こうの攻撃を退けこちらの攻撃は決めた。これ以上はないという程の鮮やかな勝利であった。

その勝利を見て指揮官はすぐに指示を下した。その指示はもう決まっていた。

「撃て！」

これだ。これしかなかった。

「撃って撃って撃ちまくれ！T - 34を倒せ！」

「はい！」

「パーキングやシャーマンも進ませろ。歩兵もだ」

この指示は予定通りだった。

「そしてあのア力共をここから追い出せ。いいな」

「了解です！」

こうしてアメリカ軍は一転して反撃に転じた。パットンを先頭に
して無敵と思われたT - 34の軍団を撃破してそのまま勝利を収め
た。パットンの鮮やかなデビューであった。

「やりましたね」

「ああ」

勝利を収めた後の戦場で指揮官は部下達の言葉を受けていた。戦
場には破壊されたT - 34が累々と横たわりその無残な姿を見せて
いる。

「まさかここまで上手いくとはな」

「思いませんでしたね」

「名前だけはあるか」

今度はパットンを見ての言葉だ。今は進撃を止め休んでいる。

「あの癩癩持ちのな」

「癩癩持ちは癩癩持ちでしたけれどいい癩癩持ちでしたよ」

部下の一人が笑いながら述べた。

「あの人は」

「そういえば嫌っている奴はいないな」

「わかりやすいんですよ。裏表がなくて」

パットンは少なくともそういう男だった。

「自分の考えもはっきり言いましたしね」

「そつだな」

そつした性格はアメリカ人の間でも有名になっていた。

「それが今こうやって戦車になつてか」
「ですね」

「またアメリカの為に戦ってくれている」
「そうですね。何かそれを思うと」

「いい名前だな」

そのパットンという名前自体への言葉だった。

「怪獣みたいな名前だけれど頼もしい」

「はい」

今度はこう言ったのだった。

「それじゃあこのままな」

「頼りにさせてもらいますか」

「北朝鮮の奴等を一気に押し潰す」

指揮官は言った。

「それでせめてこの半島だけはアカのいない場所にするぞ」

「わかりました」

こうしてパットンは再び進撃をはじめた。この朝鮮戦争は後に中国の義勇軍が参戦し空ではミグ15とF-86セイバーの対決があり結果として痛み分けに終わり現在に至る。だがこのパットンという戦車が無敵と言われていたT-34を破り活躍した話は事実だ。この戦車は名前の由来になったその將軍の名声に恥じない活躍をしたのであった。

パットン 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2816g/>

ボタン

2010年10月8日15時04分発行